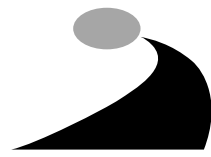


秋田県立大学 図書館だより



No. 6 2003.3

》》》》》》》》》 目次 《《《《《《《《《

私の進路を決めた一冊の本 総合科学教育研究センター教授 三浦 順治	1
ゲノム時代の図書館 図書・情報委員会委員 岡野 桂樹	3
資料の活用：オンラインジャーナルの利用	5
図書館利用案内	6
お知らせ	8



私の進路を決めた一冊の本

総合科学教育研究センター教授 三浦 順治

1958年8月、希望と不安のうちに私は横浜港をでた。船はプレジデントウイルソン号、見たこともない大きな豪華客船であった。日本は戦後まだ完全には立ち上がっていない45年前のことである。現在と違い留学の機会はきわめて少なく、われわれにアプライできるのはフルブライト奨学金だけであった。さいわい留学試験に合格して、当時言語学のメッカ、メジナと言われたミシガン大学に受け入れてもらった。秋田から出ていった私にはミシガン大学での毎日は興奮の毎日であった。当時、日本の英語学、

英語教育界では神様のように語られていた雲の上の存在の先生たちが教室で目の前にいた。日本で読んで理解できなかったことを著者であるその先生たちから直接教えてもらうことができた。夕方など学生会館にわざわざ来てくれることもあった。さすがに大先生は実にわかりやすく説明してくれた。その弟子たちにも質問に行っていたことがあるが、みなやたらに難しくかつ詳しくてむしろ分かりにくかった。

大学は教室での講義と、図書館での研究と、学生会館の地下でのビリヤードで過ぎていった

感がある。この図書館は「図書館利用の思い出」(『図書館だよりNo.3』)に神山学部長が述べておられるミシガン大学のcentral campusのそれである。ここで私はある本と運命的な出会いをする。そしてこの本がその後の40数年の私の研究を方向付けることになった。Robert Lado博士の*Linguistics Across Cultures, 1997*(『文化と言語学』大修館)という本である。現在ではこれは構造的に異なる各個別言語をどう記述し比較するかを包括的に取り上げた対照言語学の嚆矢であるとされている。当時の構造言語学の理論から2言語間の音組織、文法組織、語彙組織、書記組織、文化の対照的比較の方法を提示したものである。この順序で進めて、現在私は文化にかかわる思考の型の比較に取り組んでいる。表紙の裏に1958年9月20日読み始めと書いてある。読みながら図書館の窓越しに雪のちらついているのを見た記憶があるので、数ヶ月はかかったものと思う。その中身からまさに目から鱗の数ヶ月であった。

40代から3度、長期客員教授(visiting professor in residence)にミネソタの州立大学に招かれた。私の出し物はたいてい日英対照研究に基づくものであるが、向こうの学生は強い興味を示して聴いてくれる。昨年9月に同大学の大学院のESL(English as a Second Language)のTeaching Methodのクラスでの講義を依頼され、'Contrastive Rhetoric'と題して話してきた。これもまたミシガン大学の図書館で読んだあの本の延長である。

「図書館」は「library」の呼び名でなく、アメリカの大学や研究施設では「Learning Resources Center」とか「Learning Resources and Technology Services」という呼び名が多く使われる。単に本を取り扱うことだけではなく、キャンパスの中心にあって多面的な資料とサービスを提供する場であるという意味である。わ

が秋田県立大学の図書館の英語名も大学草創のとき、そんな働きを期待して「Learning Resources Center」とした。

昨年訪れたMinnesotaの大学の新築の大学図書館には次のように書かれてあった。

インフォメーションとテクノロジーサービスでリーダーシップと優越性のモデルたらしめんとする。この目的に向かって革新と公共サービスが顕在する環境を提供するよう努力する。

そこで気のついたことをいくつか紹介しよう。

階段を上ったところにFDのオフィスがあり、室長もおり、facultyの悩み、特に若手の教官の対応に関心があるとのこと。この部屋にはFD関係の図書やAV機器もあった。

一、二階にオープンのコンピューター室があり、ITサービスと指導が週日は午前8時から午後10時まで受けられる。日曜でも午後4時から10時までというのは面白い。

図書館の利用時間は週日午前7時45分から午後11時45分まで。土、日も開館するが特に日曜は午後1時から11時45分まで。女子学生のためには、夜遅いとか、冬など天気の良いときは警務員に連絡すると車までエスコートしてくれる。

Semesterのはじめに授業担当者が係りに申し込めば、その科目に必要なテクノロジーを専門家が来て学生に1, 2時間講義をしてくれる。説明の仕方、使用した機器についての評価もまたある。

図書館長の肩書きは'Dean'である。学部長なみの権限と責任をもつfull-timeのポジションで兼職ではない。

わが県立大学のますますのソフトとハードの両面の多岐にわたる充実と発展をねがって結びとしたい。



ゲノム時代の図書館

図書・情報委員会委員 岡野 桂樹

<幕開け>

生物学、生物資源科学にとって、21世紀は輝かしい幕開けとなりました。ヒト、イネなど重要な生物のゲノム、またはその概要が次々と解読、発表されたからです。本当の意味で生物学はゲノムの時代になったと言えます。これらの情報はもちろん、Nature誌などにも発表されましたが、その情報の詳細はインターネット上で公開されています。WEB上の各種の生物ゲノムサイトやNCBI (<http://www.ncbi.nlm.nih.gov/>)、EBI (<http://www.ebi.ac.uk/>)などの検索エンジンの助けを借りることで、小学生からノーベル賞科学者にいたるまで、だれでも簡単にアクセス可能な情報です。

<雑誌のオンライン化>

多くの著名雑誌も、オンライン化されました。大学でオンライン閲覧できる*Nature*や個人購読している*Cell*などは、研究室の端末から直接PDFファイルでカラーの別刷も手に入ります。*J. Biol. Chem.*なども1年たてばだれでもPDFの別刷が得られます。

ほんの10年程前まで、論文を書く時、研究の構想を練る時、何かわからないことがある時はいつでも、図書館は常に第一選択でした。図書館はいつも情報の源でした。残念ながら現在、図書館を単なる情報集積基地として考えた場合、その役割は低下しつつあるように思えます。

<脳の好きな空間?>

脳や神経に関する理解も、ここ10年ほどで大きく進歩しました。記憶、感覚受容、情動など

の分子レベルの理解が進み、複雑かつ美しい脳のしくみが明らかになりつつあります。脳のマシーンとしての基本は、シナプス伝達にあります。シナプスは可塑性を持ち、驚くほど単純な原理、すなわち、繰り返し刺激と多入力同時刺激を抽出、増強し、散漫な刺激を重視しない特質を持って動作していると考えられています。我々のすばらしい脳、思考は無数のシナプス回路網の産物なのです。

インターネットの特徴は、“効率的”なネット検索とそれらが持つ大量の情報を瞬時に獲得できることにあるでしょう。ほんの数時間検索しているだけで、その情報はもし印刷するとすれば数百ページ分に相当することがよくあります。ところが、私にはその情報がなかなか記憶に残らない、応用しにくいと感じます。もちろん私の頭が良くないせいともいえますが、少なくとも一部分は上に挙げた多量で散漫な情報をカットしやすい脳の動作原理によっているのかもしれない。検索や情報の多くが、ブラックボックスにつつまれていることに、いらだちを感じることもしばしばです。なぜか、大宇宙をひとりてただよっているような孤独感を感じるのは私だけでしょうか？

図書館で、雑誌を眺めたり、本だなを閲覧する時、私は不思議なことに図書館に行く本来の目的以外の論文や本を手にとってしまう。時間の経つのを忘れてしまいます。大変“非効率”的なのですが、多元的な入力の入る図書館は、逆に考えを深められる場所、別の着想や実験法にいきあたりそうな予感のある場所のような気がします。私にとって、図書館は行きつ戻

りつしながら、考えることのできる居心地の良いスペース、つまり脳にやさしいスペースなのです。多くの歴史のある大学で図書館は特別な存在です。単なる情報源というだけでない何かを、図書館はもっているのかもしれませんが。

<居心地の良い知的な空間としての図書館>

我々の図書館は、蔵書に関してはなかなかのものだと感じます。特に細胞生物学や分子生物学の領域では新しい蔵書がものをいいますので、国内でも屈指の新刊書をそろえていると自負しております。学部学生の教育に関する蔵書も大変すばらしいものです。

とはいえ、図書館は21世紀を迎え、なんらかの変革をせまられているのは事実でしょう。将来的に図書館がインターネットと対抗するのは無理でしょう。ゲノム情報が完全にネット化されている現在、その他の情報も確実にネット化されていくことでしょう。図書館のオンライン化も進むことでしょう。では将来の県立大学の図書館はどのように変わっていくのでしょうか。

私は歴史有る大学の図書館の雰囲気、大好きです。重い扉の向こうに少しかび臭いけれどひんやりとした静寂でアカデミックな空間がある図書館です。しかし、残念ながら県立大学の図書館で実現するのはむずかしいかもしれません。とはいえ、図書情報が満載されているからといって、コンピューター端末が並んでいるだけのスペースになってしまうことは上記の理由で好ましいとはいえません。第一それは図書館と呼ぶのにふさわしくないでしょう。ではどのような図書館が良いのでしょうか。私はこれからの図書館は、本もネット端末もあり、学生や教職員が満ち溢れる活気あふれる知的なスペースであってほしいと思います。

私が4年間お手伝いしている図書・情報委員会は図書と情報の複合体を意識したすばらしい組織です。ただし、大学の組織上は一元化されているとはいえ、今のところ図書館はその“情

報”をうまく活用しきってはいないように思えます。

現在、私が研究関係で本や雑誌を読むときには、必ずコンピューター、ネット情報が必要です。方法の詳細が、ネットで公開していると書かれる論文に数多く出会うようになりました。また、本を読んでいて遺伝子配列やタンパク質の3次元構造がでていれば、ネットでさまざまな検索を試みたくくなります。関連論文の概要もその場でみたいものです。じっくり寄り道をしながら、本や雑誌を読めるスペースでありながら、手元でネット情報も見られる。図書と情報が近い関係にある。そんな図書館が私の理想です。

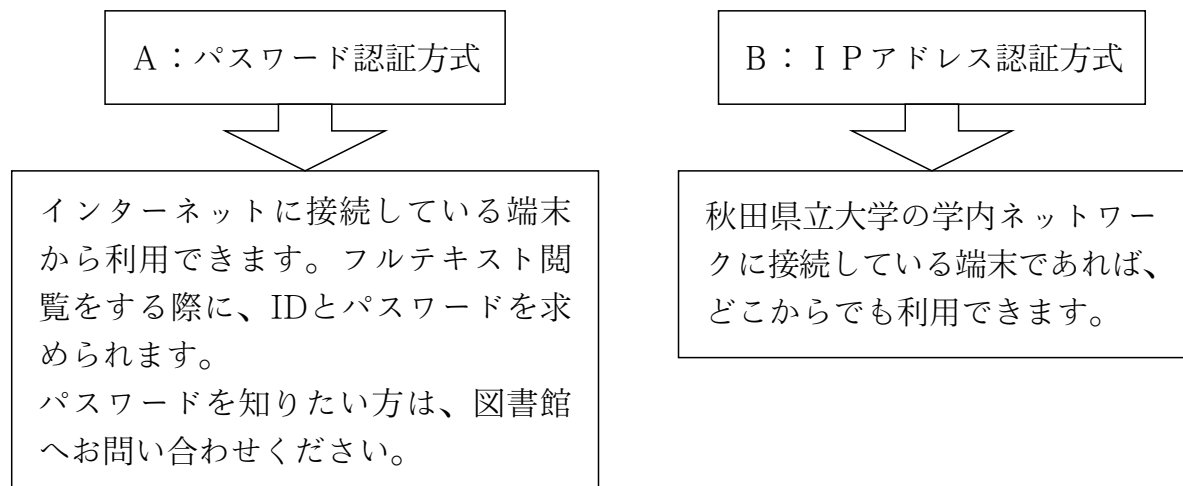
静粛さなどで問題もあるかも知れません。その場合は、図書館の一部についてスペースをくぎり多目的ホールのようにして、新着雑誌とインターネットコンピューターが並び（ついでにコーヒーやお茶が飲める？）、その場所では本も貸し出し手続きなく閲覧できるというのも良いかもしれません。学生に聞くとコンピューター室の方が図書館より圧倒的に利用頻度が高いようです。ある程度の数のインターネット接続可能なコンピューターは、学生が図書館に親しむのにも貢献できるはずですが、そばに本があれば、自然に手にとってみるものです。学生が実験以外の時間、時間の空いたときにはいつでも図書館に行き、勉強し、自然に本やインターネットをみることは、とても魅力的です。

私の父は本マニア、読書マニアです。糖尿病で片目の視力をほとんど失った今でも、拡大鏡を使って本を読んでいます。私は小さいときから、本の山の中で育ちました。私が図書館好きな理由はそのためなのかもしれません。図書館が本来の知的空間としての役割を果たしながら、かつ学生にとって、とても居心地が良い空間になることを望みます。そのために、少しでもお手伝いできればと思います。

資料の活用

オンラインジャーナルの利用

本学図書館が契約し、フルテキストまで見られるジャーナルは、次のとおりです。利用の仕方が2通りありますので、間違いの無いように御利用ください。



< A方式 >

- | | |
|----------------------------------|---|
| A 1. <i>Nature</i> | http://www.nature.com/nature |
| A 2. <i>Nature Biotechnology</i> | http://www.nature.com/nbt |

< B方式 >

- | | |
|---|---|
| B 1. <i>EMBO Journal</i> | http://www.emboj.org |
| B 2. <i>European Review of Agricultural Economics</i> | http://www3.oup.co.uk/erae |
| B 3. <i>Genes & Development</i> | http://genesdev.org |
| B 4. <i>Proceedings of National Academy of Sciences</i> | http://www.pnas.org |

◎◎オンラインジャーナル利用上の注意◎◎

1. 利用できるのは、秋田県立大学の教職員・学生のみです。
2. 論文の大量ダウンロードは行わないこと。
3. ダウンロードしたファイル・プリントアウトした印刷物は第三者へ配布しないこと。
4. パスワードは、他の人に教えないこと。

図書館利用案内

<開館時間>

通常期 月～金 9:00～19:00

休業期 月～金 9:00～17:00

<休館日>

土・日・祝日・年末年始（12/29～翌1/3）

資料整理日（上記を除く、偶数月の月末日）

<図書・雑誌・音声資料の貸出>

	冊数	貸出期間		
		図書・音声資料	雑誌	雑誌最新号
学 生	5冊	14日	3日	1日
大学院生	10冊			
教 職 員	15冊	30日	7日	

* 借りたい資料と「学生証」「教職員証」を持ってカウンターへお出でください。



厳守

図書館の資料は共有財産です。返却期限までに、必ず返却してください。引き続き利用したい場合は、1回に限り延長貸出をすることができます。返却期限を過ぎた場合は、図書館から返却督促の連絡をしますので、速やかに返却してください。

<文献複写・現物貸借 その他の調査相談>

必要な資料が本学図書館にない場合は、他大学図書館から取り寄せることが可能な場合があります。お気軽にカウンターへ御相談ください。

<図書館内での複写>

著作権法に抵触しない範囲で、図書館資料の複写が可能です。

希望する方は、事前に「複写申込書」をカウンターに提出してください。

<複写できない例>

◎雑誌の最新号の論文全体

◎図書の全て

◎1枚ものの地図の全て

休日夜間の開館

本学教職員・学生は、以下の時間も図書館を利用することが可能です。
図書館に入退館するためには、

利用登録した教職員証・学生証が必要です。

また、この時間帯は、図書館職員が不在です。利用できるサービスが限られますので、

マニュアル『休日夜間利用の手引き』をよく読んで、利用してください。

開館時間

通常期	月～金	19:00～22:00
	土・日・祝日	9:00～19:00
休業期	月～金	17:00～22:00
	土・日・祝日	9:00～17:00

利用できない日 年末年始（12/29～翌1/3）
他、臨時に休館することがあります。

4月～5月にかけて、新入生対象の図書館オリエンテーションを開催します。
新入生以外でも、希望する方は、是非御参加ください。

内容 図書館施設案内・OPAC（蔵書目録）操作方法・休日夜間利用方法

厳守

図書館内では次の行為は禁止です。他の利用者に迷惑がかかりますので、おやめください。

- ・ 飲食
- ・ 携帯電話の使用
- ・ 私語

ゼミの演習、共同レポートの作成など、複数名での打ち合わせ等をしたい場合は、グループ閲覧室・共同研究室を御利用ください。

14年度雑誌合冊製本

1999年度発行分の雑誌を合冊製本しました。

今後も、3年経過したものを順次製本の予定です。

貸出は未製本のものと同様に扱います。

14年度受入資料

受入冊数（15年3月13日現在）

	和 図 書	洋 図 書	視聴覚資料等
秋田キャンパス	3,424	598	103
本荘キャンパス	3,507	751	38
合 計	6,931	1,349	141

秋田県立大学 図書館だより No.6 2003年3月発行

秋田県立大学 図書・情報センター (URL:<http://www.akita-pu.ac.jp/library/lib.html>)

●秋田キャンパス

〒010-0195

秋田市下新城中野字街道端西 241-7

TEL018-872-1561 FAX018-872-1674

E-mail: a_library@akita-pu.ac.jp

●本荘キャンパス

〒015-0055

本荘市土谷字海老ノ口 84-4

TEL0184-27-2049 FAX0184-27-2185

E-mail: h_library@akita-pu.ac.jp

*ご意見・ご要望等をお寄せください。
